2011・１０・？

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
２０１１・１０・？

【Ｎコード】
Ｎ７２９９Ｘ

【作者名】
ごはんライス

【あらすじ】
８０００字設定。一人称と三人称を交互に。バンドオンザラン形式。

メモ

小さい頃の予想
３５歳↓
正社員ｏｒミュージシャンｏｒ漫画家（最高）
既婚（嬉しい）
子供三人（楽しい）
車あり（愉快）
家建てる（爽快）
家族旅行に行く（痛快）
心「家族のために、がんばるぞ」（幸せ）

現実
３５歳↓
アルバイト（悲鳴）
童貞（陰鬱）
原付（中古）
実家暮らし（絶望）
小説家志望（１／１３００↑すばる　１／５０００↑電撃　↓なる可能性薄い）
華子（結婚の可能性薄い）
十年以上、旅行に行ってない（自殺願望）
心「うわああああああああああああああああああああ」（人生ジェットコースター）

１９８５年の社会状況↓

非正規が６００万人（１／９）
非正規「オレは自由だぜ」（幸せ）

２０１１年の社会状況↓
非正規が１７００万人（１／３）
非正規「うわあああああああああああああああ」（人生おばけ屋敷）

注
実話です。

では、ここからお待ちかねのフィクションです。
どおおおおおおおん。
コンビニがぶっ飛んだ。また自爆テロだ。最近ないなと思ったら、やっぱりある。
「こういう世の中だからなあ。オレだってテロしたい。ただ自爆はいやだな……」
とはいえ、オレがテロしたい理由は大したことない。単にアルバイトがいやというだけだ。民族問題とかそういうわけじゃない。
コンビニもアルバイト店員が多いからテロするわけにはいかんしな。
社員だって過労だから文句ないが、ともかくアルバイトはやだ。
とはいえ、小説を書くしかない。それしか道がない。ほかに道があればそれをしてる。オレももう３５だ。
非正規は、１９８５年の段階では６００万人。今じゃ、１７００万人。いよいよ日本も佳境に入った。もうすぐ崩壊だな。

華子にメールする。
ぶっ殺すぞこのやろう！
返信が来る。
ぶっ殺して！
はははははは。なかなか気が合うな。
とんだＳＭプレイだ。涙が出るぜ。
自販機でサイダーを買う。宮沢賢治もサイダーが好きだったらしい。賢治は生涯童貞だった。オレも童貞だ。
タバコをすう。バルザックもすぱすぱすっていたらしい。バルザックはメタボだった。オレもメタボだ。
とはいえ、芥川の真似はしない。芥川は３５で自殺している。真似したくねえ。
「ああ。しゃあないねえ。これまあ」
遠くを見て、ため息が出る。世の中ちゅうのは、本当に疲れることである。
バイトはつらい。
この前、上司に命令され、百キロある石を抱え、徒歩で、三キロ先の倉庫まで運んだ。逆らうと、前みたいに猫の死体を家の前に置かれるので仕方なしにした。
これで時給７５０円である。ひどい時代である。神も仏もない。格差社会。これが現実だ。民主主義国家といっても、それは建前なのである。現実はちゃう。
「まあしゃあないねえ」
国会議事堂を爆破したい。
国家公務員宿舎。総工費が１０５億。家賃２０万が相場のところ４万。
なぜ裕福な公務員に贅沢をさす。アルバイターは月収１２万で家賃５万のアパートに住んでいる。
理不尽。世の理不尽。
バイトはつらい。

この前、上司が、命令した。百キロある石を抱え、ここに五時間立っておれと。ここことは、サウナ室である。
汗がだらだら流れるし、腕はしびれるし最悪。これで時給７５０円。
世の中というのは理不尽極まりない。
どおおおおおおおおおおん。
また自爆テロか。幼稚園が燃えている。ちびっこたちの悲鳴が聞こえる。
「しゃあないねえ。しゃあない。時代だ」
空き缶を投げたら、トラックの窓に激突し、トラックがガードレールに突っ込んだ。
「しゃあない。不況だもの」
バイトはつらい。
この前、上司が命令した。塩を一袋食せと。いやです無理ですと泣いたら、家を爆破すると脅される。父親と母親が悲しむから仕方なくやった。
もちろん、入院した。これで、時給７５０円。労災であるに関わらず、会社からは一銭も出なかった。アルバイターなんて会社にとっちゃ人間じゃないんだろうな。
知り合いの工場で、アルバイターは危険手当が五円らしい。
これが現実。
陰鬱なる日本の現実。
「死にたい……」
踏み切りの前に立つ。イライラしてくる。
電車が通り過ぎる。今読んでるスピルバーグ映画のノベライズは、面白いし技術は高いけど、すばる文学賞には当選しないだろう。
繰り返しになるが、アルバイトは地獄である。働いても働いても低所得だ。これまた繰り返しになるが、１９８５年の段階で非正規は６００万人だった。今は１７００万人にまで膨れ上がってる。概算すると三人に一人が非正規。

オレはたまに包丁をリュックサックに忍ばせて街を歩く。警察に捕まれば銃刀法違反だ。街で包丁を振り回して暴れることを想像すると気分がよくなる。
実際にしないのはプロ作家になりたいからだ。この夢がなければ、とっくに犯罪を実行に移している。
前を見ると、休日ゆえに、女子小学生が歩いてる。
オレは女子小学生の背中を包丁で刺した。女子小学生はうつ伏せに倒れ、オレは馬乗りになる。
そして、女子小学生の背中を執拗に何回も何回も何回も刺す。
返り血を浴びる。激痛のためか、女子小学生はうんこをもらし、すごい匂いだ。
はっと気づくと、女子小学生がオレのシャツの袖をつかんでる。
「おじちゃん。助けて」
「えっ」
女子小学生は勝手にオレのリュックサックの中に入った。
すると、変な親父が走ってきて、はあはあ息を切らせながら、辺りをキョロキョロ見渡してる。包丁を握りしめてる。
「ロリ華のやつ、どこ行きやがったんだ。お客様が待ってるちゅうのに」
親父は、じろじろ見る通行人に、見せもんじゃねえぞと怒鳴り、包丁を振り回して、そのまま走っていった。
女子小学生はリュックサックから出てきた。
「あれ、もしかして君のお父さん？」
「うん。捕まったらまたエッチなことやらされちゃう」
「不況てやつか……」
普通に意味がわからない。不況てのはイミフメイだ。原付の調子が悪い。買い換えないといけないかもわからん。中古で五万くらいか。現在、所持金１８０００円。給料日まで１７日。タバコ代が４１０円。銭湯代が４７０円。バスが２５０円。ニ往復して１０００円。

仮にバスで通うとしましょう。
朝の職場に行く。家に帰る。夜の職場に行く。家に帰る。一日ニ往復で１０００円。
１７日で１７０００円。所持金１８０００円。
これが日本の現実。親がいなけりゃ成立しない生活。完全に狂ってる。
まあもちろん自己責任もある。正社員になって二倍働けって話だ。
しかし、十年も働かせておいて、この扱いはひどい。雇用責任は何割かある。
陰鬱。
陰鬱社会である。
オレは寝転ぶ。
「はあ。働いても働いても結婚できない……」
外に出て、踏み切りの前に立つ。
やはり飛び込めない。小説を大成しないといけない。
陰鬱。陰鬱社会。
ふと昔好きだった子のことを思い出す。
「元気でやってるかなあ」
いったいどこをどう間違えてこんなことになってしまったのか。
頭がおかしくなりそう。
「わああああああああああああ」
すごいスピードで走る。
家に帰って、寝転ぶ。
「ポテトチップス食べたいな」
食べたいけど、ない……。
非正規労働者は１９８５年の段階で６００万人だった。今では１７００万人にまで膨れ上がってる。わずか、２５年の間に社会構造がまるきり変わってしまった。
「……」
小説。

小説の明日はどこだ。

ここで三人称に切り替わる。「オレ」が家で寝転んでる間、プリン城では、ロイすけが、エンダー山王子と寝食を共にするようになった。城内に敵が忍び込み、誰が誰やらさっぱりわからないので、ロイすけがエンダー山王子に付きっきりになって守らないといけない。

だから、ロイすけは、エンダー山王子と同じベッドで眠る。もちろん、入り口では、兵が立っている。しかし兵がスパイという可能性もある。ロイすけは、頭に、高性能ヘルメットを被った。このヘルメットは少しの音も聞き取ることができる最強のヘルメットで眠っていても、誰かが襲ってきたらロイすけは起き上がって敵を斬るってわけだ。ロイすけは、剣を抱えて眠る。

しかし、２４時間緊張してると、お腹が減ってくる。

「ロイすけ！　また私のプリンを食べたでしょう！」

「すみません……」

ロイすけはお腹がへると、エンダー山王子の冷蔵庫を勝手に開け、エンダー山王子が寝ている間に、プリンを勝手に食べてしまうのである。

「あんまりひどいと解雇だよ！」

「そ、それは」

「じゃあ、プリン食べないで！」

ロイすけは落ち込んでしまう。

しかし、エンダー山王子とベッドに入ると、エンダー山王子はすぐにグースカ眠ってしまうが、ロイすけは２４時間護衛が仕事なので、緊張感は持続してるわけで、お腹が鳴ってしまう。

ロイすけはベッドから下りて、冷蔵庫を開けた。

「ああ。プリン。美味しそうなプリン。しかし食べたら解雇されてしまう……」

ロイすけは冷蔵庫の前でうんうん唸っていた。

すると何てことだ。こんな時に限って、入り口の兵隊がスパイだったりする。
ロイすけが冷蔵庫の前で悩んでる隙を狙い、スパイは剣で、ベッドで寝ていたエンダー山王子の身体を貫いた。「うぎゃあああああああ」
ロイすけは、ええい解雇されてもいいやと決意し、プリンを食べ始めた。
城の外では野良犬がわおおおおんと鳴いた。
月が妖しく光っていた。

ここで一人称に切り替わる。
貧困はもういやだ。もうウンザリ。
こんな苦しい生活もういやだ。頭がおかしくなる。
いいかげんにしてほしい。もうやめてほしい。
会社を解雇したい。あまりに不真面目でやる気がない。こんな会社、もう雇いたくない。
きちんと真面目に生きてほしい。これ以上、労働者に負担をかけるのはやめてほしい。
貧困はもういやだ。
そんなことを言っても出勤する時間はくる。オレは今日は朝の六時から工場だ。
「あー毎日毎日単純作業でしんどい。専門的な仕事したいなあ」
そして、深夜の十二時に仕事が終わる。くそくだらない。これで時給６００円だ。バカか。
オレは事務室に呼ばれた。
「きみ、明日から来なくていいよ」
「ええっなぜ。真面目に勤務してたのに」
「いやいや。きみに過失はないよ。単に人件費削減が目的だから」
「そんなあ」
オレは親が死んでから一人暮らしをしていたが、あっという間に

アパートを追い出され、ホームレスとなった。
橋の下で暮らそうと橋の下へ行くと、かばんが置いてあった。
かばんを開くと、何とものすごい量の札束。
「！！！！！！」
オレは、焦った。これはマフィア的なもんがからんでいるのでは。
あたりをきょろきょろ見渡す。誰もいない。
「そうか。天からのご褒美か」
オレは納得した。
そして、かばんを抱えて、ホテルに行った。
満室ですとフロントマンに言われたが、百万円ばかりちらつかせたら、特別室にご案内しますときたもんだ。
特別室はまさに皇族が泊まるかのような部屋だった。実に二十畳くらいある。
中央にでかいベッドがあり、そこに飛び込む。
「あーふっかふか。幸せだなあ」
オレはしみじみしてしまう。そういえば、工場に勤務してからろくなことなかった。これは本当に天からの恵みものに違いない。
しかし、人間というのは厄介だ。かばんが心配で心配でたまらない。マフィアに見つかったら消されてしまうのではないかという観念が頭から離れない。
オレは、ひとまず、ベッドの下にかばんを隠した。
さて、これからどうするかだ。問題は。
あんまりカネをたくさん使ってるとばれる。とはいえ、こんなにカネがあっちゃもう働く気になれない。

ここでまたもや三人称に切り替わる。「オレ」がホテルで悩んでるとき、アメリカを見たことがあるかい、あたしゃないね、あたしゃフランスは見たことあるけどね、ハーハハハハハ、バーカ、離婚だよ、イタリア女と不倫しやがって、と、ヤマコおばちゃんは言った。そんな午後。日差し。苦し紛れに雅司が言った浮気の言い訳が

ヤマコおばちゃんの飲んでいた紅茶に溶け込む。庭で、鳥がぶつぶつ言っている。野田政権に対する怒りをつぶやいてる。野田政権は仕事をしないことで有名だ。
「やっちまった。資本金が足りなかった。やばい。まじ、ラーメンが足りない」
「チャーハンでもかまわんが。しかし、リーマンショック以来、それはちょっと……マジか??」
「麺がない。ごはんもない。夢もない。はっははは。情けねえや。いんちき臭いぜ。マジ」
「止まれ！　止まれ！」
「よし行け。そこまでだ」
「そこからだ」
光一は走った。光一なりの走り方で走った。走って、走って、しばらくして止まり、撃たれた。
アスファルトに光一の死体が転がる。
二丁目に夕日が沈んだ。三好は、野良犬とボクシングをしていた。勝負は互角だ。しかし、三好には必殺技があった。スーパー三好パンチである。
しかし、野良犬にも必殺のパンチがあった。ハイパー野良パンチである。
しかし、勝負はなかなかつかない。見物人も帰っていく。
疲れてきたので、三好と野良犬はボクシングをやめ、歩いて、居酒屋「はっちゃん」に向かった。
居酒屋「はっちゃん」に着くと、三好は日本酒を、野良犬はビールを注文した。女店員の尻はすごくいい。
三好は、欲望に負け、女店員の尻を触ってしまった。すぐに警官がやってきて、三好に手錠をかけた。野良犬がげらげら笑っている。すると、野良犬も手錠をかけられた。なぜだと怒鳴ると、警官は、人をバカにするやつは許さんと怒鳴り返した。
居酒屋「はっちゃん」は、１２時には閉まった。居酒屋から出て

きたサラリーマン、山田山雄。彼は酔っぱらいながら、悩みを抱えていた。悩んでいたから飲んでいたのか。

山田山雄……不思議な男である。

それは、誰もが知ってるようで、誰も知ってない。そんな不思議な男。

その名を、山田山雄。サラリーマン。独身。２５歳。

山雄は、趣味でダンスをしていた。

ある日の午後も、休日になると、駅前広場で、山雄ダンスをする。

すごいダンスだ。すごい。すごい。驚くべき身体能力。アマチュアじゃなければ、きっとプロだろう。間違いない。アマチュアだからプロじゃないだけだ。それほど、すごい、ものすごいダンスを披露した。当然、お客は大興奮だ。

山雄は、さらにダンスをする。独特の山雄ダンスをする。すごい技だ。感動的だ。客の中には涙を流してる者さえいる。

警察がやって来た。

「君。服を着なさい。裸で何をやっておるんだ」

「警察ひっこめー」

「ダンスの邪魔すんなー」

しかし、山雄は、反逆的な男じゃない。おとなしく、警察につれていかれた。

ここで再度、一人称に切り替わる。

オレは競馬でお金をすってしまい、かなりかなりかなりきつい労働をしていた。百キロ以上ある石を運ぶのである。あまりにきついので途中で石を、車のボンネットに叩きつけ、屁をこいて、アスファルトの上に仰向けになった。夜空を見上げ、涙が出る。

誰だったか忘れたが金持ちな評論家がくだらん本で、貧乏人は身なりなど気にせずがむしゃらに働け、そうすれば今の境遇から抜け出せみたいなことを書いていた。

ネットカフェで暮らす若者が意外ときれい好きでおしゃれゆえに、それに違和感を覚えたようなのだ。

やかましいわボケってなもんである。貧乏人がきれいにして何が悪いと。ほっとけアホってなもんである。

オレは起き上がり、歩き始めた。

オレは、民家を発見した。二階建てである。

金属バットでガラス窓を叩き割った。

電気がぱぱぱっとついた。

ソファを発見してそこに寝転んだ。パジャマを着た親父とおばはんが何かわめいているが無視。疲れているのである。

目がさめたら、留置場の中にいた。

「？？？？？」

警官に、出してくださいと言うが、だめと言われる。

オレはふてくされて寝転んだ。

どいつもこいつも腹が立つ。ぶち殺したい。

ああ。留置場から出てもバイトかあ。低賃金重労働に耐え、しかしこれも世のため人のためと思い、必死でがんばってるのに、ゴミだクズだとぬかしやがる。

バイトなんてがんばらなくてもいいんだ。社会保障してもらってないわけだから。

それを好意でやってやってんのに文句ばかりぬかす。ほんま知らんわ。何様のつもりだ。

疲れた。イライラする。働いても働いても賃金が上がらない。生きてる意味がない。生きているなら適正報酬をもらいたい。

怠けてるからだ。能力がないからだ。聞き飽きた。もう何千回何万回聞いた。

いつまで低価格を享受するつもりだ。くそが。

原爆を百発くらい落としたい。

ここで三人称に切り替わる。「オレ」が、留置場で悩んでる頃、とある喫茶店。
「愛してないの」
「愛してないよ」
「じゃあ別れる」
「了解」
「あっさりしてるわね」
「あっさりしてるさ。別れのときなんてこんなもんさ」
悲しいことである。陰鬱。簡単に言えば、不況が悪いのである。
不況は本当に悪いやつだ。性太郎は喫茶店を出た。
ぶらぶら歩いてると、ケータイが鳴った。
「性太郎先生。代理授業入れませんか」
「いいですよ。何時ですか」
性太郎は仕事が終わってから、銭湯に行った。広い湯舟に浸かっていると、いやなことが色々忘れられる。
脱衣場で着替えてるとき、ケータイが鳴った。
「あっ大統領」
「性太郎くん。明日の会議出られるかね」
「はい。バイトが終われば」
「わかった。国防に関する二重構造の書類を作っておいてくれたまえ」
夜の１１時。性太郎は、部屋で、小説を書いていた。時代小説である。武田信玄を独自の視点から描いた長編だ。
性太郎は、展開に詰まる。気分転換に、コンビニへ行く。エロ本を立ち読みしたいが、テープで閉じてある。
性太郎は、ハンバーガーとシーチキン巻きと皮串とコーラを買った。
ついでに、地下バーへ行く。
バンドが演奏している。薄暗い。いい雰囲気だ。
「マスター。日本酒ちょうだい」

「アホ正宗ね。了解」
性太郎はべろんべろんに酔っぱらう、勝手にドラムを叩いて、ドラマーに怒られている。
性太郎は、翌日、バイトが終わってから、大統領官邸で会議をし、終わったのは深夜の二時。ただ、そのあとは休みだったので昼まで寝た。
性太郎は、起きてひげを剃ってから、外に出る。
喫茶店で小説を少し書いた。コーヒーをたくさんお代わりした。
いつの間にか夕方。外に出ると、夕暮れ。夕日の前をガメラが横切る。
性太郎は、エッチな店へ行く。
エッチな店から出て、公園で友達を呼んでミニサッカーをした。
性太郎。２６歳。

一人称に切り替わる。「オレ」は、留置場を出てからバイトをしながら再び小説を書き始めた。

すばる文学賞に落選した。
青天の霹靂だった。オレにとって、すばる文学賞は通過点に過ぎなかった。到達点ではなかった。すばる文学賞に当選し、そして、プロ作家として大活躍していこうと色々計画を練っていた。プロになってからが勝負だ。とにかく、当選したら、ばりばり書いてがんばるぞ。
と燃えていたら、落選……頭が混乱している。想定外のことに頭が混乱している。
「？？？？？」
意味がわからない。すばる文学賞に応募した原稿を読み返す。
「なぜ落選？？？」
何回読み返しても、落選の理由がわからなかった。
なので、友人に聞いてみた。

「どう？　なんで落選したか、わかる？」
「わからん。なんでだろう」
編集部に電話してみた。
「ええと。ちょっと担当者に代わります」
「お願いします」
オレの原稿を読んだ下読みの人が電話に出た。
「ええとですね。まず、文法的なことは大丈夫でした。誤字脱字はありませんでしたし、言葉の間違いもありません。整合性もありました。落とした理由はですね。まず、ギャグが不完全です。これはおそらく、松本人志の『笑えない笑い』を踏襲されたと思うのですが、笑えないシリアスのままで終わっています。それから、反復文体ですが、筒井康隆の反復文体とは違う視点から書かれていたので、そこはオリジナルがあり、よかったと思います。しかし、やはり、すばる的には実験的過ぎますね。もう少し、エンターテイメント寄りだったらよかったと思います。非正規雇用問題は上手く描けていたと思います。キャラクターの葛藤がよく描けていました。冒頭の畳み掛けるような展開もよかったです。全体的な話の展開も、ポール・マッカートニーの『バンド・オン・ザ・ラン』のようでした。めまぐるしく変化するので、そこが斬新だと思いました。あと、川の中のシーンはちょっと不完全でしたね。もう少しうまく水の中にいることが表現できるとよいと思いました。ポニョみたいな感じが理想ですが、小説だと難しいかもわからんですね。それから、最後の通り魔シーンは、面白かったですが、しかし、やはり、書籍にするのはきついかなブラック過ぎるかなと判断しました。意図することはわかるのですが、しかし、出版を考えると少し難しいと思いました。ざっと、そんなところです」
「ありがとうございます」
下読みの人がオレの意図をきちんと読み取ってくれていたので嬉しかった。いいかげんに読まれてたんだと少し勘違いをしていたのだ。

ようし。来年もがんばるぞ！！
来年こそアルバイト脱出だ！！

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7299x/

2011・１０・？

2011年10月19日14時57分発行